

病変の詳細な評価法、体にやさしい治療法が進歩

心臓血管カテーテル治療の新しいトピックといえば、溶けるステント「BRS」※1です。BRSは動脈硬化した冠動脈狭窄部分を押し広げ、その後体内で自然に溶ける素材でできているため、体にやさしいのです。日本では昨年承認され、本年より段階的に施設を拡大し、使用される予定です。ただし、現在一般的に使われている薬剤溶出ステントと血小板薬2剤による治療成績は十分に高く、どちらがより安全性・有効性に優れているかなどについて、今後詳しく調査していく必要があります。

一方、血管壁の動脈硬化が厚くなった部分を削り取りするDCA※2は、新しい機器の臨床使用が2015年から始まっており、今後DCAと薬剤溶出バルーン(DCB)や前述のBRSを組み合わせてのことも、可能になると期待されています。

治療法を適切に選ぶためには、正しい診断が必要です。心臓血管の病気で、虚血の状態をきちんと評価することが重要ですが、その方法も体に負担の少ないものが開発されています。その代表例がFFRCTです。冠動脈CTは解剖学的狭窄を検知、FFRCTはこれま

い生理学的虚血を計測していましたが、FFRCTでは撮像したCT画像を解析することで非観血的にFFR(虚血)を測定可能となります。FFRCTを行い、さらに詳細な検査および治療が必要だと判断すればカテーテル検査を実施します。

近赤外線を用いたOCTも普及が進んでいます。これは、柔らかい動脈硬化が、急性心筋梗塞など重篤な病気に発展する危険性を評価するのにも有用な検査です。

検査法、治療法は今後も発展していきますが、最も大切なことは患者さんに優しく、安全性・有効性が高いことで、患者さんの年齢や基礎疾患などに応じて選択することです。そのために学会としても尽力していきます。



日本心臓血管インターベンション治療学会副理事長
洛和会丸太町病院
洛和会京都血管内治療センター
センター所長

上田 欽造

ものが開発されています。その代表例がFFRCTです。冠動脈CTは解剖学的狭窄を検知、FFRCTはこれま

い生理学的虚血を計測していましたが、FFRCTでは撮像したCT画像を解析することで非観血的にFFR(虚血)を測定可能となります。FFRCTを行い、さらに詳細な検査および治療が必要だと判断すればカテーテル検査を実施します。

(※1)生体吸収性ステント (※2)方向性冠動脈粥腫切除術